

## 研究報告文書に何が必要なのか

## ～「研究論文」と「研究ノート」の差違を例に～

【本稿は2006年12月2日に行なわれたお茶の水女子大学日本言語文化学会の  
開会冒頭説明の一部をもとに、加筆再構成したものです。】

## 1. 『言文』の審査は厳し過ぎるか？

ここ数年『言語文化と日本語教育』の編集査読体制が再編されたのに伴い、「以前に比べて投稿論文の審査が厳しくなり、採択されにくくなった」という会員の声を耳にすることがあります。もちろん、審査を厳格にすることで厳選された質の高い論文を掲載することは学界の研究水準の向上に寄与します。その一方で、新たに得られた知見はできるだけ早く学界に報告した方が分野の発展に貢献することも事実です。これらに加え、研究会誌は会員に研究成果発表の場を提供するという使命を担っていることも忘れることはできません。

これらの要請に鑑み、従来「研究論文」という単一の掲載範疇であったものを2006年度より「研究論文」と「研究ノート」に二分することにより掲載基準の透明性を高めることを図りました。図1は『言語文化と日本語教育』の掲載基準からの抜粋です。

## A. オリジナルな研究・実践の報告または総括・論考

\*いずれも外部査読者による査読があります。投稿回数に制限はありません。

\*「研究ノート」として既に掲載されたものを発展させ、改めて「研究論文」として投稿することもできます。

A-1. 研究論文：研究史あるいは社会的ニーズなどの中で当該研究が適切に①位置づけられ、追求する価値のある②研究課題に対し、妥当性のある③方法によって、報告価値のある④結果を報告し、十分な⑤解釈・考察を加えたもの。10枚以内。

A-2. 研究ノート：追求する価値のある②研究課題に対し、妥当性のある③方法によって、報告価値のある④結果を報告しているもの。8枚以内。

図1 『言語文化と日本語教育』「研究論文」と「研究ノート」の掲載基準

<<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/genbun/journal.html>>

(下線および①～⑤の番号付与は本稿文責者による。)

本稿はこの二つの掲載範疇が設けられるに至った背景を説明します。【注記：『言語文化と日本語教育』の投稿記事にはこれらの他に「A-3. 調査・実践報告」というカテゴリーが

ありますが、本稿では「A-1. 研究論文」と「A-2. 研究ノート」に絞って解説します。】

## 2. 研究論文と理論・先行研究・実践との関係

まず、研究報告文書の基本構造をおさらいしておきましょう。通常、研究論文は表1にあるような下位項目から構成されています。

表1 研究報告文書の構成要素

書誌情報	標題
	著者名・所属
概要紹介・検索のための情報	要旨
	キーワード
本文	①位置づけ (はじめに・先行研究)
	②研究課題
	③方法 (データ収集・分析)
	④結果
	⑤考察・今後の課題・結論
補足的情報	稿末注
	参照文献
	謝辞
	付録

研究とは何らかの問い(研究課題)に答を出すことを目的として行なわれるものですが(酒井 2006)、通常、単一の研究(実験・調査など)によって現象やその背後にある法則性の全てが明らかになることはありません。ほとんどの場合、図2のように一つの研究の結果(答)からより深い新たな問いが生まれ、それに答えるために次の研究を重ねることによって、次第に全貌が明らかになっていくものです。



図2 研究の発展過程

この関係を、論文の本文部分の章立てと対応づけて示したのが図3です。一つの研究(「当該研究」)はそれだけで完結したものではなく、それまでに蓄積された研究/実践活動、理論などを踏まえて(①)行なわれます。具体的には研究課題(問い)を設定し(②)、そのために必要なデータ収集方法や分析方法を立案し(③)、得られた結果を記述整理分析して問いへの答を出します(④)。この結果は再び先行研究や理論に照らして解釈され、

新たな論題の提案がなされます。場合によっては、理論の不備の指摘や修正の提案に繋がる場合もあります。(⑤)。

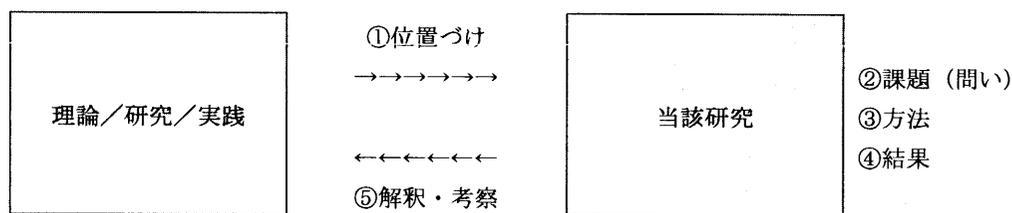


図3 研究論文の構成と理論・先行研究/実践との関連

### 3. 読者は研究報告書に何を求めているのか？

以上を踏まえ、研究報告書に求められる要素を説明しましょう。

#### 3-1. 研究報告書の完成形とは

一般に、図3の①②③④⑤の全てにおいて完成度の高い論文が読者にとって最も学ぶところが多いことはいまでもありません。優れた論文は研究技術面や知見の報告のみならず「先行研究をどう意義づけるか」「次には何に取り組むべきか」などの点においても示唆に富むものです。

#### 3-2. 研究報告書の最低必要条件とは

とはいえ、「課題(②)・方法(③)・結果(④)を適切にまとめた研究報告ができあがっているのであれば、その段階でいち早く出版してほしい」という速報性へのニーズも学界には存在しています。たとえば特定の論題(たとえば「格助詞の習得順序」)について一連の先行研究の結果の総括を試みる場合(Light & Pillemer 1984)、「課題」(②)に沿ってどのような「方法」(③)を用い、どのような「結果」(④)得られたかが明快に書かれている研究報告であればその知見に一定の報告価値を認め、総括の対象に加えて差し支えありません。そういう目的で文献を収集している研究者は、他の研究者が得た知見を一刻も早く論文として出版し「先行研究」として引用できる形にしてくれることを願っています。

### 4. 投稿論文はどこが不備で落ちるのか？

上記のような五つの要素は、投稿論文の査読過程においてどのように評価されるのでしょうか。実は、実施した研究そのものの報告にあたる「課題」(②)・「方法」(③)・「結果」(④)は一応の水準に達しているのにも関わらず、「位置づけ」(①)や「考察」(⑤)が不十分であるとして不採択に至るケースが結構よくあります。

こういった査読評に応えて「位置づけ」「考察」を含めより完成度を高めた上で発表することができれば素晴らしいことですが、その推敲に数年を要するとすればそれまでの間、せっかくの研究結果も「先行研究」としての扱いを受けることができません。最悪の場合、他の仕事が忙しいなどの理由により著者が改稿を諦めてしまえば、本来報告価値があるはずの知見の報告が永遠に学術誌掲載論文として陽の目を見ないという残念な結果にもなりかねません。投稿者が、自身の中心的な研究テーマとは異なる領域で見いだした知見では、ことにこういうことが起こりがちです。

## 5. 研究報告の条件

とはいえ、これら五つの要素の全てを高水準で満たした論文と、「位置づけ」や「考察」はまだ十分に論じきれていない報告とを同列に扱うのは公平ではなく、研究誌に対する学問的評価にマイナスの影響を与えるおそれもあります。

表2 『言語文化と日本語教育』における「研究論文」と「研究ノート」の掲載条件

	掲載カテゴリー	
	A-1. 研究論文 (～10 枚)	A-2. 研究ノート (～8 枚)
① 適切な位置づけ	○	
② 意味ある研究課題	○	○
③ 妥当性のある方法	○	○
④ 報告価値のある結果	○	○
⑤ 十分な解釈・考察	○	

そこで、「課題・方法・結果という、知見の報告価値をあらしめるために最低限必要な部分になら合格点をあげられる」という段階の報告書を「研究ノート」とし、「位置づけ」・「考察」を含めて完成度の高い文献（「研究論文」）とは別のカテゴリーとして掲載するというのが『言語文化と日本語教育』の現在の掲載基準です（表2）。「研究ノート」で掲載する場合、「位置づけ」・「考察」については必ずしも多くを語らなくてもその目的を達するという趣旨により、制限枚数は「研究論文」より2枚少ない「8枚」としています。

【注記：いずれの範疇でも、参照文献リストなどの形式面が整っていることは最低限の条件として当然要求されます。】

## 6. 言語文化学会が提供する研究業績作りのステップ

学会誌の中には一度「研究ノート」として掲載された論文は「発表済み」として、再度

投稿することを認めないものもあります。しかし『言語文化と日本語教育』ではむしろ改稿のうえ、より高レベルのカテゴリーで再掲載されることを望ましいことだと考えています。

したがって、『言語文化と日本語教育』に投稿した論文が「研究論文」の域には達しないが「研究ノート」としてなら掲載できるという査読判定になった場合、まずはその段階で「研究ノート」を発表し、その後さらに改稿して「研究論文」採用を目指すことが可能なわけです。

もちろん、投稿する前にできれば研究会で発表し聴衆からのフィードバックを仰ぐことをお勧めします (図 4)。

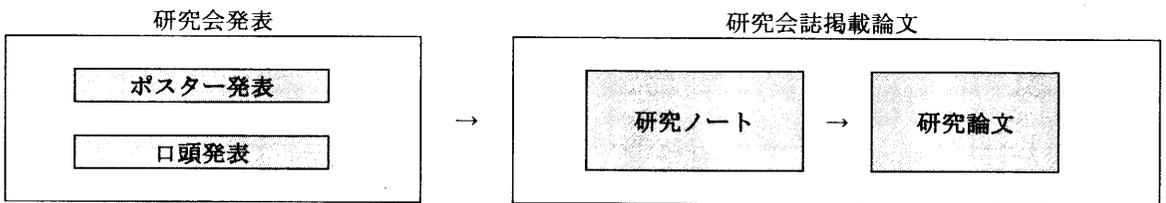


図 4 言語文化学会研究会における研究成果公開の時系列モデル

このように、日本言語文化学会は「会員の研究者としての成長をサポートする」という目的を念頭において、研究発表会や会誌の運営にあたっています。

(文責：佐々木嘉則)

#### 参考文献

酒井聡樹 (2006) 『これから論文を書く若者のために 大改訂増補版』 共立出版

Light, R. J. Pillemer, D.B. (1984) *Summing Up: The science of reviewing research*. '84. Harvard University Press.